報告

韓国での電子音響音楽会議・音楽祭への参加報告
Report on participation in KEAMSAC and SICMF 2017

佐藤 亜矢子
Ayako SATO
東京藝術大学
Tokyo University of the Arts

概要

2017 年 10 月に光州で開催された韓国電子音響音楽学会の年次大会 KEAMSAC、ならびに併催された音楽祭 SICMF についての参加報告を行う。両者はいずれも名称に Korea、Seoul とあるが、プログラムは国際的な公募で集まった各国からの参加者による研究発表・作品上演で成り立っている。日本人唯一の参加者として、この一連のイベントについて、筆者が過去に出席した ICMC、SMC、WOCMAT といった他学会との比較も交えて報告する。

1. はじめに

本稿で ICMC、SMC、WOCMAT を比較対象として挙げた理由は、①過去に筆者が発表者として出席したコンピュータ音楽系のイベントのうち、②国際的な公募を行い採択された作品のコンサートあるいはインスタレーション展示とペーパーの発表が同期間に行われるという共通点にある。ICMC(International Computer Music Conference) は周知の通りコンピュータ音楽系の代表的な国際会議で、筆者が出席した中でも 2014 年の SMC(Sound and Music Computing Conference) との共同開催の際には 900 を超える作品応募があったという大規模なものである。SMC も比較的規模の大きい会議の一つだが、欧州を拠点とすることを特徴としている。WOCMAT(International Workshop on Computer Music and Audio Technology Conference) は台湾で開催される国際会議で、規模は小さいものの、2016 年度に Ircam Forum との併催を実現したり、しばしば John Chowning や Miller Puckette といった重要人物を基調講演者として招くなど存在感を示している。

そして、この度 2017 年次大会に筆者が初めて出席した KEAMSAC(Korea Electro-Acoustic Music Society's Annual Conference)、SICMF(Seoul International Computer Music Festival) は、韓国で 20 年以上の歴史を持つ。二つの異なる名を持つイベントは、1993 年に設立された KEAMS(Korea Electro-Acoustic Music Society) によって運営されており、KEAMS は「今もなお韓国のコンピュータ音楽の活発な拠点であり、メンバーは現在、アジア、ヨーロッパ、アメリカで学んだ数々の作曲家、コンピュータ音楽家、研究者から構成されている」(Dudas 2010)。実際、筆者が現地で KEAMS メンバーや発表を行った韓国人から聞いた話によれば、多くが欧米への留学経験があるということだった。さて、この一連のイベントについての「報告」をこの度のテーマに掲げたのは、近隣国での開催であるため日本からの参加者が自分以外にある程度いるだろうと予測して会場に赴いたところ、KEAMSAC、SICMF 共に日本人発表者が筆者のみであったと言う理由からである。そこで今回、筆者なりの視点からこの会議参加について報告したい。未だ過去の経験は浅く、知識や情報の偏りが散見されると思われるが、どうかご容赦いただきたく、また、新たな議論の提起や助言を頂戴できれば幸いである。

2. KEAMSAC2017

2.1. 会議の概要

2017 年 10 月 24-26 日に、KEAMS の年次大会 KEAMSAC2017 が光州の ACC(Asia Culture Center) で開催された (図 1)。光州は韓国南西部に位置する広域市である。最寄りの光州空港は国際線の運航がなく、海外からの出席者はソウルや韓国の他都市を経由した。会場の ACC は光州空港から地下鉄で 30 分程度で、駅が施設に直結しており交通の便が良い。ACC Children、ACC Archive&Research、ACC Creation、ACC Culture Exchange、ACC Theater という 5 つの施設から成る近代的な複合施設である (図 2)。会議は ACC Theater にて開催された。この建物内には数百人を収容できる「シアター」や、会議室サイズの「アトリエ」があり、基調講演を含む全てのペーパー発表は、壁面いっぱいに備

え付けられた大きな鏡の前にスクリーンを設置し「アトリエ 2」にて行われた。

ペーパー募集に際して今年度大会独自のテーマは特に設定されておらず、カテゴリーとしては「コンピュータ音楽学、電子音響音楽の分析、音楽心理学、コンピュータ支援作曲、自動作曲、美学」などに関するトピックが推奨された。7 月に提出〆切が設定され、その後 8 月に延期された後、採否は 9 月に通知された。投稿はフルペーパーではなく 2000words 以内のアブストラクトであった。後に、採択された発表の中からいくつかがジャーナル掲載のためにセレクトされ、セレクトされた著者はフルペーパーを提出する、という流れとなっている。

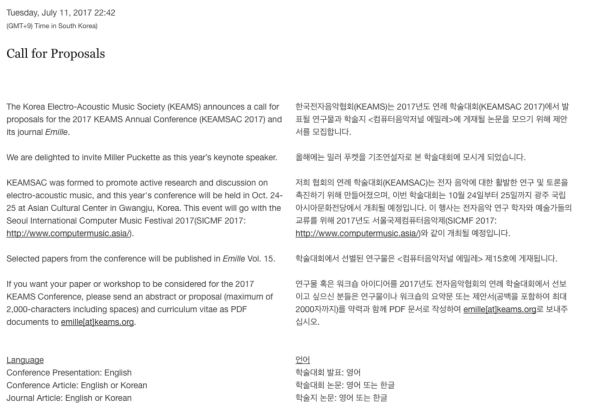
図 **1**: Asia Culture Center（2017 年 10 月 24 日筆者撮影）

図 **2**: ACC Theater（2017 年 10 月 23 日筆者撮影）

2.2. 会議での言語

KEAMSAC2017 の公式ウェブサイトにある CFP のテキストは韓国語、英語で併記されている (図 3)。また、会議での発表は英語に限るが、proceedings の原稿や、セレクトされた場合ジャーナルへのフルペーパーは韓国語も認められている。国際的な公募を行うとはいえ「韓国電子音響音楽学会」の年次大会であるゆえ、投稿者への配慮として言語の選択肢が設けられているのは不自然でもないだろう。他の国際会議ではどうか。ICMC では、筆者が知り得る限りの情報ではあるが、2013 年度以降は英語以外の言語が使用されていたことはなかったが、上海で開催された ICMC2017 の CFP、CFW は中国語の併記があり、原稿も英語と中国語が認められていたようである。大国である開催国内からの積極的な投稿を促す為の策であろうと思われる。2018 年は ICMC 年次大会が大邱で開催されることとなっており、東アジアでの開催が連続する。ICMC2018 の公式ウェブサイトが早速立ち上がっているが、現時点では英語のみの表記であり、CFP にも言語に関する記載はないため、ペーパーも発表も英語のみという一般的な国際会議の扱いとなろう。KEAMS のメンバーでもあり、ICMC 大邱大会のホストを務める Tae Hong Park と Doo-Jin Ahn も KEAMSAC2017 に姿を見せており、会議の出席者と積極的に交流を図っていた。ICMC は年ごとに異なるエリアが会場となる傾向にあり、近隣国で 2 年連続して開催されることは珍しい（図 4)。さらに、アジアでの開催は 2003 年のシンガポール大会以来、東アジアでの開催は 1999 年の北京大会以来と、上海大会が久々のアジア開催であった。それに加えて翌年も大邱ということで、東アジアのコンピュータ音楽界の活性化に期待できる流れである。

会議での使用言語の話題に戻そう。毎年台湾で開催される WOCMAT は名称に International とあるものの、比較的国内向けの印象が強いように感じた。筆者はこれまで 2012、2016 年次大会に出席したが、2016 年は基調講演、通常のペーパー発表ともに英語から台湾語への逐次通訳が行われていた。現地語を理解しない出席者・発表者にとっては、国際会議の場で都度話の流れを中断されることに若干ストレスを感じるといったような状況も見受けられたが、現地からの参加者が多勢を占めていたため、彼らへの配慮と思われる。



Tuesday, July 11, 2017 22:42
(GMT+9) Time in South Korea)

Call for Proposals

The Korea Electro-Acoustic Music Society (KEAMS) announces a call for proposals for the 2017 KEAMS Annual Conference (KEAMSAC 2017) and its journal *Emille*.

We are delighted to invite Miller Puckette as this year's keynote speaker.

KEAMSAC was formed to promote active research and discussion on electro-acoustic music, and this year's conference will be held in Oct. 24-25 at Asian Cultural Center in Gwangju, Korea. This event will go with the Seoul International Computer Music Festival 2017(SICMF 2017: http://www.computermusic.asia/).

Selected papers from the conference will be published in *Emille* Vol. 15.

If you want your paper or workshop to be considered for the 2017 KEAMS Conference, please send an abstract or proposal (maximum of 2,000-characters including spaces) and curriculum vitae as PDF documents to emille[at]keams.org.

Language
Conference Presentation: English
Conference Article: English or Korean
Journal Article: English or Korean

한국전자음악협회(KEAMS)는 2017년도 연례 학술대회(KEAMSAC 2017)에서 발표될 연구물과 학술지 <컴퓨터음악저널 에밀레>에 게재될 논문을 모으기 위해 제안서를 모집합니다.

올해에는 밀러 푸켓을 기조연설자로 본 학술대회에 모시게 되었습니다.

저희 협회의 연례 학술대회(KEAMSAC)는 전자 음악에 대한 활발한 연구 및 토론을 촉진하기 위해 만들어졌으며, 이번 학술대회는 10월 24일부터 25일까지 광주 국립아시아문화전당에서 개최될 예정입니다. 이 행사는 전자음악 연구 학자와 예술가들의 교류를 위해 2017년도 서울국제컴퓨터음악제(SICMF 2017: http://www.computermusic.asia/)와 같이 개최될 예정입니다.

학술대회에서 선별된 연구물은 <컴퓨터음악저널 에밀레> 제15호에 게재됩니다.

연구물 혹은 워크숍 아이디어를 2017년도 전자음악협회의 연례 학술대회에서 선보이고 싶으신 분들은 연구물이나 워크숍의 요약문 또는 제안서(공백을 포함하여 최대 2000자까지)를 약력과 함께 PDF 문서로 작성하여 emille[at]keams.org로 보내주십시오.

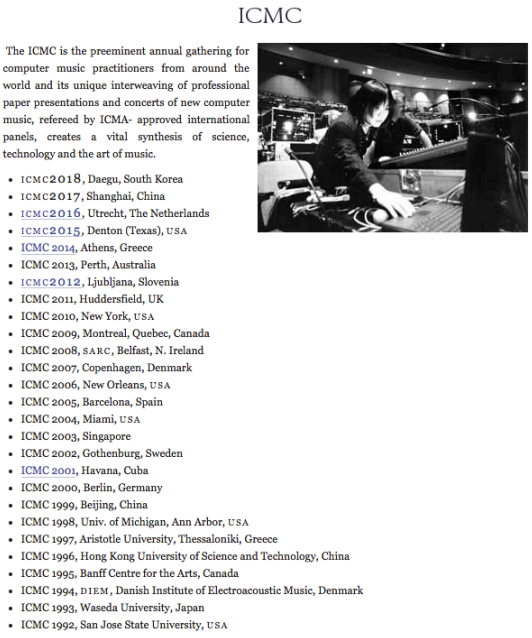
언어
학술대회 발표: 영어
학술대회 논문: 영어 또는 한글
학술지 논문: 영어 또는 한글

図 3: KEAMSAC2017 公式ウェブサイトより、CFP のスクリーンショット
(http://keams.org/emille/call/keamsac2017_call.html)

2.3. 参加者の国籍・所属国

通常、多くの国際会議では発表者、聴講者の全てが登録費を支払う必要がある。学生料金や early bird を設定することで参加者の経済的負担軽減への工夫がされてはいるが、特に遠隔地からの参加や、研究費で補える立場にない学生などの身分にとっては、旅費を含めて大きな出費となる。これまで筆者が出席した ICMC2013（パース）、2014（アテネ）大会では少額ながら採択された学生向けの旅費補助があり、提出ペーパー・作品の評価に応じて金額の多寡が設定されていた。とはいえ、毎回このような会議出席の為に助成金の申請に奔走するのが筆者を含めた恐らく多くの学生の現状であろう。そのような中で、KEAMSAC、SICMF2017 ではすべての採択者が登録費を支払う必要はなかった。さらにすべての採択者と同伴する演奏者に宿泊先が用意されているという手厚い補助もあり、これらは Arts Council Korea によるものであった。CFP、CFW の時点で既にそれは投稿者に公表されており、その成果だろうか、実際に会議に出席した顔触れはアジアからよりむしろ遠隔地からが多いほどであった。欧米の機関に所属している出席者が多く見られたが、国籍はメキシコ、コロンビア、イラン、タイ、クロアチアなど様々であった。

それに対し、時差もなく容易に訪問できる最も近い国でありながら、日本人発表者が SICMF 含めて筆者以外にゼロという状況には驚いた。投稿はあったが全てリジェクトだったのか、あるいは投稿自体がなかったのかは分からない。会議の関係者に、毎年これほど日本人が少ないものかと尋ねたところ、年によっては 2、3 人いるという回答だった。どうやらこれは SICMF を含めての話のようである。KEAMS の公式サイトに記録のある 2011 年次大会以降のプログラムを確認したところ、2013、2015 年次大会に日本人の発表者がそれぞれ 1 名ずつあるが、他の年はゼロである。その 2 名の発表者はいずれも所属機関が日本ではなく、欧米を拠点としているようであった。加えて、所属先が日本の機関である外国人も 2017 年次大会までの記録には見られなかった（2011 年は所属先の記載なし）。日本の研究機関に所属する日本人が発表を行った事例は、基調講演も含めて少なくとも 2011 年度以降で筆者以外になかったようである。なお、SICMF の発表者（作曲家）は 2003 年次大会以降の記録が公式ウェブサイトで確認できる。2017 年は公募作品以外のコンサートを含め 72 作品が上演されたが日本人作曲家はゼロ、直近では表 1 の通りで、音楽祭においては、日本人作曲家が 5 分の 1 を占めるような年もあり、平均すると確かに毎年 2、3 名が作品を上演していることになる。



ICMC

The ICMC is the preeminent annual gathering for computer music practitioners from around the world and its unique interweaving of professional paper presentations and concerts of new computer music, refereed by ICMA- approved international panels, creates a vital synthesis of science, technology and the art of music.

- ICMC2018, Daegu, South Korea
- ICMC2017, Shanghai, China
- ICMC2016, Utrecht, The Netherlands
- ICMC2015, Denton (Texas), USA
- ICMC 2014, Athens, Greece
- ICMC 2013, Perth, Australia
- ICMC2012, Ljubljana, Slovenia
- ICMC 2011, Huddersfield, UK
- ICMC 2010, New York, USA
- ICMC 2009, Montreal, Quebec, Canada
- ICMC 2008, SARC, Belfast, N. Ireland
- ICMC 2007, Copenhagen, Denmark
- ICMC 2006, New Orleans, USA
- ICMC 2005, Barcelona, Spain
- ICMC 2004, Miami, USA
- ICMC 2003, Singapore
- ICMC 2002, Gothenburg, Sweden
- ICMC 2001, Havana, Cuba
- ICMC 2000, Berlin, Germany
- ICMC 1999, Beijing, China
- ICMC 1998, Univ. of Michigan, Ann Arbor, USA
- ICMC 1997, Aristotle University, Thessaloniki, Greece
- ICMC 1996, Hong Kong University of Science and Technology, China
- ICMC 1995, Banff Centre for the Arts, Canada
- ICMC 1994, DIEM, Danish Institute of Electroacoustic Music, Denmark
- ICMC 1993, Waseda University, Japan
- ICMC 1992, San Jose State University, USA

図 4: ICMA 公式ウェブサイトより、ICMC 開催地リストのスクリーンショット
(http://computermusic.org/page/23/)

しかし会議においては何故これほどに少ないのだろうか。かといって韓国国内からの発表者ばかりということでもなく、2017 年次大会で行われた 16 のペーパー発表のうち、韓国人は 4 組、うち 1 組は所属先がアメリカの大学である。これまで筆者が出席した ICMC、SMC は、KEAMSAC と会議自体の規模が桁違いに異なるとはいえ、日本の機関に所属する日本人のペーパー

表 1: 年度別日本人作品数（SICMF 公式ウェブサイト (http://computermusic.asia/index.html) アーカイヴ・ページの情報に基づき、筆者作成）

年度	全作品数	日本人作品数	割合
2017	72	0	0.00%
2016	35	3	8.57%
2015	30	3	10.00%
2014	31	4	12.90%
2013	37	8	21.62%
2012	29	0	0.00%
2011	38	1	2.63%

やポスター発表は毎回必ず何組も見かけた。いずれの大会開催地もオーストラリア、ギリシャ、スウェーデン、ドイツと、日本から決して近い距離にある国ではなかった。KEAMSAC が開催される韓国の方が、経済的にも時間的にも負担なく日本から容易に訪れることができるはずなのに、この差はどこから来るのか。まずは会議自体の知名度が大きく影響しているだろう。ICMC、SMC はコンピュータ音楽界での代表的な国際会議であり、日本に限らずこれらに照準を合わせて投稿を目指す学生、研究者は少なくないはずである。ペーパー採択率や CFP の〆切時期、会議の開催時期も原因だろうか。しかし KEAMSAC の採択率は公表されていない。CFP は〆切の数ヶ月前に ICMA の会員メーリングリストにも回送されており、決して〆切直前まで CFP が公開されなかったわけではない。投稿〆切は同じ 10 月開催の ICMC 上海大会が 3 月であったのに対し、KEAMSAC は 7 月（その後 8 月に延期）であり、時間的な余裕はあったはずである。開催時期は今年度については ICMC（10 月 15 日〜20 日) の数日後であった。実際、上海で ICMC での発表を終えてから光州に来たという参加者が多くみられたし、極端に参加が難しい時期ということもないはずである。ところで、KEAMSAC と同じく東アジア地域で開催される WOCMAT は、先述の通り比較的台湾国内向けの印象が強く、2016 年次大会は Ircam Forum との併催だったが、出席者は台湾人が多くを占めた。ペーパーのリストを見ると、13 組中日本人が 1 組、欧米系の名前は 3 組、作品では 51 作品中日本人が 3 作品、欧米系は 9 作品で、それ以外は中国系の名前が並んでいる。WOCMAT は毎年 12 月頃に開催されることが多いようで、韓国同様に日本からのアクセスは容易であるが、時期的な問題から日本を含め台湾国外からの出席が多くないと言えるかもしれない。

2.4. プログラム

会議はシングルトラックで、二日間で基調講演を除いて発表は 16（うちキャンセルが 2 件、ビデオ発表が 2 件）という小規模なものであった。第一セッションの前には Miller Puckette による基調講演が行われた。また、翌 26 日にはメキシコからの参加者である Edmar Soria による Algorithmic Parametric Electroacoustic Composition のワークショップが開催されたが、筆者は帰国便が迫っており残念ながら参加できなかった。会議には、SICMF の出品者もリハーサルの合間を縫って多く参加しており、会場の「アトリエ 2」はやや手狭となっていた。KEAMSAC2017 の全プログラムは図 5 の通りである。

Korean Electro-Acoustic Music Society's Annual Conference 2017
October 24 (Tuesday) - 26 (Thursday), Atelier 2, Asia Culture Center in Gwangju

DATE	TIME	SESSION CHAIR	PROGRAM	
Tuesday Oct. 24	09:00		*Registration*	
	09:15	-	Kevin Parks (Catholic University of Daegu, Korea)	Greetings
	09:20	-	Miller Puckette (keynote speaker) (University of California San Diego, USA)	The Oscillator as a Dynamical System
	10:30		*coffee break*	
	10:50	Kevin Parks	Kittiphan Janbuala (Silpakorn University, Thailand)	Illusion: Computer Synthesis Composition
	11:25		Marko Ciciliani (University of Music and Performing Arts Graz, Austria)	Token of Enunciation in Multimedia Performance
	12:00		*lunch break*	
	13:20	Kevin Parks	Christopher Dobrian (University of California, Irvine, USA)	Gesture, Acceleration, and Expressivity
	13:55		Max Neupert (Bauhaus University, Germany)	Optimizing chromatic Keyboards for small, non-tactile Surfaces
	14:30		*coffee break*	
	14:50	Kevin Parks	Edmar Soria (Independent Artist, USA)	Immersive Space Composition in Electroacoustic Music
	15:25		Dae Hoon Jang (Kookmin University, Korea)	Installation Art and Electroacoustic Work
	16:00 (16:45)		Giulio Colangelo Valerio De Bonis (Directors of MA/IN festival in Matera, Italy)	A New Approach to the Musical Form in Sound Installations: [re]BO[u]NDS and the composition in real time
Wednesday Oct. 25	09:00		*Registration*	
	09:20	Kevin Parks	Sangbong Nam (Seoul National University, Korea)	The mPoi in the wireless network system
	09:55		Matthew Blessing (Louisiana State University, USA)	Musical Chairs: Building an Interactive Home Orchestra with Audio-Embedded Furniture
	10:30		*coffee break*	
	10:50	Kevin Parks	Ayako Sato (Tokyo University of the Arts, Japan)	A Study on Presque rien No.2 composed by Luc Ferrari, focusing on establishing the identity of Presque rien in relation to his other works
	11:25		Marko Ciciliani (University of Music and Performing Arts Graz, Austria)	Artistic Research in the Field of Audiovisual performances Using Elements from Computer Games
	12:00		*lunch break*	
	13:20	Kevin Parks	Michael V Blandino (Louisiana State University, USA)	Creating and Composing for a Rotational Musical Interaction Interface
	13:55		Seungyoun Hong (Catholic University, Korea)	The Past and the Present of Composing Music with Artificial Intelligence
	14:30		*coffee break*	
	14:50	Kevin Parks	Tae Hong Park Min Joon Yoo (New York University, USA)	Soundmapping our World in 3D: data-Driven, community-Driven, & art-Driven
	15:25		Maurilio Cacciatore (Conservatory of Castelfranco Veneto, Italy)	MMixte: a new Max package for live electronics with musical instruments
	16:00 (16:45)		Anna Terzaroli (Santa Cecilia Conservatory, Italy)	d_plot Software Tool
Thursday Oct. 26	09:00 (13:00)	-	Edmar Soria (Metropolitan Autonomous University, Mexico)	[Workshop] Algorithmic Parametric Electroacoustic Composition (requirement for participants: laptop)

図 5: KEAMSAC2017 公式ウェブサイトより、KEAMSAC2017 プログラム (http://keams.org/emille/keamsac/keamsac2017_programs.html)

第一セッションはタイの作曲家による創作ノートから開始された。これは SICMF での上演作品ではなかったが、その後の発表でも作品に関するペーパーが相次いだ。例えば、韓国の Dae-Hoon Jang は「Installation Art and Electroacoustic Work」と題し、彼の関わった展覧会に関する発表を行った。同じく韓国の Sangbong Nam は「The mPoi in the wireless network system」として、

mPoi という彼が創作したセンサー・ベースの楽器について、実演も含めながら技術面や応用例を紹介した。クロアチア出身で現在はグラーツの IEM に所属する Marko Ciciliani は二つのペーパーを発表し、特に、ゲームの要素を取り込んだ作品に関する「Gamified Audiovisual Works - Composition, Perception, Performance」は参加者から大きな関心が集まっていた。同日夜のコンサートでは、ペーパー内容とは異なるものの、ゲーム的要素の見られる Ciciliani 氏オリジナルの楽器を用いたパフォーマンスを行い、演奏後は聴衆が興味を持って彼に楽器の説明を求める様子が見られた。彼の他にも SICMF で作品を上演した作曲家によるペーパー発表が数件あったが、Piece and paper ではなく、上演作品とは異なるトピックでの発表だった。CFP に Piece and paper のカテゴリーが設けられていないからであろうか。しかし個人的には上演作品に関するペーパー発表を見てみたかったという感想を持った。どの発表も質疑は活気付き、筆者の発表を含めて基調講演者の Puckette 氏も積極的に発表者へコメントや質問を投げかけていたのが印象的であった。

3. SICMF2017

3.1. 音楽祭の概要

2017 年 10 月 23-28 日に、ソウル国際コンピュータ音楽祭 SICMF2017 が KEAMSAC2017 の会期を挟むようにして開催された。会議とは名称を異にするものの、ICMC 等と同様に会議と共通のオーガナイザーによって運営され、同じ会場で行われるので、名称の違い以外は会議と密に連結している。作品募集はペーパーよりも早い時期に行われ、3 月に提出〆切、4 月に採否が通知された。募集カテゴリーは「1. テープ・ミュージック、2.4 名までの楽器演奏を伴う電子音響音楽（テープあるいはライヴ）、3. ライヴ・エレクトロニクス・ミュージック、4. オーディオ・ヴィジュアル・メディア・アート」とされていた。コンサート作品のみの募集で、インスタレーションなど常設展示形態の作品募集はなかった。

音楽祭では 6 日間に 10 のコンサートが実施され、筆者はそのうち、10 月 23 日に行われた「コンサート 1」から 10 月 25 日の「コンサート 5」を鑑賞した。ほとんどのコンサートは ACC Theater 内の「シアター 2」で行われたが、「コンサート 4」は「アトリエ 1」で、「コンサート 3」と「コンサート 5」の 4 作品中 3 作品は同施設内の「ロビー」で実施された。「コンサート 5」の二番目の作品として予定されていた作品は「コンサート 4」として「アトリエ 1」での上演となった。「シアター 2」は先述の通り数百人を収容できるホールで、ACC のスタッフによるきめ細やかな対応が印象に残った。座席指定のチケットを受付で受け取り、会場に入ると、スタッフが親切に席まで案内してくれる。一般的なコンサートでは通常に見られる光景であるが、国際会議のコンサートでこのように懇切丁寧な接客をされた経験はこれまで筆者にはなかった。通常は会議の運営スタッフが会場対応までも行なっていることが多いように思われる。観客側の客観的な印象ではあるが、SICMF では ACC スタッフとの役割分担が成功しており、KEAMS スタッフが本来の仕事に専念できているように感じられた。

図 6:《Pluton》リハーサルの様子（2017 年 10 月 24 日筆者撮影）

3.2. 5 つのコンサート・プログラム

「シアター 2」で行われた「コンサート 1、2」では、それぞれ 4 作品ごとに休憩を挟んだ 8 作品が上演された。テープ作品は各コンサートに 2 作品、オーディオ・ヴィジュアル作品が 1〜2 作品であり、他はライヴ・エレクトロニクス作品が多勢を占めた。CFW では奏者 4 名までと限定されていたが、ほとんどの作品がソロ奏者による演奏であった。

「コンサート 3」は Philippe Manoury の《Pluton》(1988-89) が台湾のピアニスト Shiau-uen Ding によって演奏された (図 6)。《Pluton》は Miller Puckette とのコラボレーションから生まれた作品であり、1988 年に野平一郎のピアノ演奏によってアヴィニヨンで初演されている。SICMF2017 のコンサートでは Puckette 自らが Max/MSP のオペレーションを手がけるということで、上演前から人々は大きな期待を寄せていた。会場の「ロビー」は広々としたエントランス・ホールで、観客は大階段に腰掛けて鑑賞した。階段下の「ロビー」には SICMF2017 のロゴと写真が入った大きな屏風型のパーテーションが設置され、それを背にスタインウェイのグランドピアノが置かれた。ピアノの手前に Puckette 氏のための長机が用意され、氏は観客に背を向ける形でコンピュータと譜面に向かっていた。演奏後は、コ

ンピュータ画面に表示されたままの Max パッチ、譜面を見ようと観客が興味津々で長机に群がっていた。

「コンサート 4」は「アトリエ 1」で行われた。ペーパー発表が行われた「アトリエ 2」よりもやや広めの空間で、照明が落とされ暗幕で覆われていたように見え、元の姿は確認できなかったが、ひょっとすると「アトリエ 2」のように壁面一杯に鏡が備え付けられているような部屋だったかもしれない。8 作品の予定だったが「コンサート 5」にプログラムされていた 1 作品が加わり、9 作品の上演となった。8 作品は「コンサート 1、2」と同様の傾向で、テープ作品が 1 作品、オーディオ・ヴィジュアル作品が 2 作品、他は多くがソロ奏者のためのライヴ・エレクトロニクス作品であった。本来「コンサート 5」にプログラムされていた「コンサート 4」最後の作品、オーストリアの noid and Klaus Filip による《Sonic Luz》は、様々な模様や写真がプリントされた円盤を用いたオプトソニック・シンセサイザーのライヴ・パフォーマンスで、視覚的にも観客を楽しませ、ステージ上の机に散りばめられた数々の円盤と彼らの装置もまた、観客の興味を惹いた。

「コンサート 4」終演のおよそ 30 分後、「コンサート 5」は場所を変えて「ロビー」で行われた。作曲家自身によるライヴ・パフォーマンスの 3 作品が上演された。それぞれが個性的であり、一つは 2.4. で述べた Marko Ciciliani のゲーム要素のある《Croatia Atomic Etudes》、続く韓国の Joo Won Park による《Touch》は、音の出る玩具や櫛やガラクタのような小さなオブジェなどを「演奏」するライヴ・エレクトロニクス・パフォーマンスであった。最後の Eric Honour による《Handcrafted Ale》もユニークで、作曲家はまず開栓前のビール瓶とジョッキを持って登場した。瓶やジョッキを叩いたりビールをジョッキに注ぐなどして発音しオーディオ・プロセッシングを行い、最後には作曲家がビールを飲み切ってしまうというパフォーマンスであった。「コンサート 5」の終演は 22 時半を過ぎており、その後、既にビールを飲み切った Honour 氏含めて参加者らで beer party に出かけることになったわけだが、ともかく、姿勢を正して聞くようないわゆるコンサートというよりもよりラフな、ICMC などにあるナイト・コンサートに近いような印象を「コンサート 5」には感じられ、なおかつ個性にあふれた作品が揃い、筆者にとっては滞在最後の夜を非常にリラックスしつつ刺激を受けながら楽しむことができた時間となった。

3.3. テープ作品の扱い

全作品数が 72 と、昨年度以前より倍増した今回の SICMF であったが、ICMC や WOCMAT などにしばしばある「リスニング・ルーム」は設置されていなかった。テープ作品、要するに fixed media 作品は「リスニング・ルーム」行きになりがちで、主にアクスマティック作品を作曲する筆者自身もせっかく採択されたのに「リスニング・ルーム」にプログラムされて落胆するという経験を何度もしてきた。しかしながら、演奏者のないテープ作品を、真っ暗なコンサートホールで延々聞き続ける退屈さもまた理解している。アクースモニウムはその点で素晴らしいシステムと言えるわけだが、これについては本稿で扱うトピックの範疇にないため特に触れない。ただ、筆者が出席した SMC の 2013（ストックホルム）、2016（ハンブルク）年次大会では、いずれもテープ作品でもきちんとリハーサルの、つまり「サウンド・チェック」ではない、時間が設けられ、アクースモニウムと呼べるほどの大掛かりなスピーカー・システムではなかったにせよ、作曲家自身でフェーダーを操る「演奏」をすることができたことは、記しておきたい。

SICMF2017 では、テープ作品も公募カテゴリーにあったものの、採択数を抑えており、各コンサートに 1〜2 作品のみという、聴衆にとっては程良いバランスを保っていたように思われる。8.1ch までを用いることができたが、テープ作品の「演奏」は行えなかったようである。

テープ作品は CFW に気軽に応募しやすい反面、作曲家の名前も作品名も聴衆に分からない状態で多数の作品がループ再生される「リスニング・ルーム」行きだったり、場合によってはコンサートにプログラムされても「再生」にとどまり「サウンド・チェック」すらさせてもらえないようなこともあったり、やや邪険に扱われがちのように感じることが多々ある。アクスマティック作曲家としては、この状況についても参与観察を続けていきたい。次年度以降の SICMF でどのように扱われるかは不明であるが、少なくとも今年度まで「リスニング・ルーム」は無く、テープ作品も全てコンサートにプログラムされていたようである。

4. おわりに

本稿では、筆者が出席した KEAMSAC 及び SICMF の 2017 年次大会の様子を、過去に出席した他の国際会議との比較も交えながら報告した。経験の浅い筆者による報告であるため比較対象や視野が限られてしまったものの、採択者への経済的サポート、それも理由の一つか参加者の多国籍な顔触れ、会議スタッフと会場スタッフの役割分担の成功によるスムーズな運営など、様々な特徴を確認することができた。また、SICMF に限った問題ではないにせよ、テープ作品の扱いについては筆者自身引き続き問題意識を持って接していく必要性を改めて感じた。いずれにしても、次も出席してみたいと思わせる興味深い一連のイベントであったことは間違いない。国際会議や音楽祭の継続的な開催は、大

学で教鞭を執る教員がほとんどであろう運営メンバーが本業を抱えながら携わらねばならない大仕事であるし、わずか数日間のために数ヶ月を費やす大きな負担の上に成り立っているはずだ。矛盾するようだが彼らへの感謝と賞賛という意味で、是非、次年度もまた開催して頂ければと、期待を込めて本稿を締め括りたい。

この作品は、クリエイティブ・コモンズの 表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、 http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/ をご覧頂くか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。

5. 参考文献

Dudas, Richard., and Jongwoo Yim. 2010.「韓国のコンピュータ音楽概観 An Overview of Computer Music in Korea」『先端芸術音楽創作学会会報』2 (2): 28–31.

Intarnational Computer Music Association. http://www.computermusic.org/ (Accessed December 11, 2017.)

ICMC/EMW2017 http://www.icmc2017.com/en/ (Accessed December 11, 2017.)

ICMC2018. https://icmc2018.org/ (Accessed December 11, 2017.)

IRCAM *Philippe Manoury, Pluton pour piano midi et électronique temps réel.* http://brahms.ircam.fr/works/work/10493/ (Accessed December 11, 2017.)

2016 Joint WOCMAT - IRCAM Forum Conference http://wocmat-ircam.strikingly.com/ (Accessed December 11, 2017.)

Korea Electro-Acoustic Music Society. http://keams.org/ (Accessed December 11, 2017.)

Seoul International Computer Music Festival http://www.computermusic.asia/ (Accessed December 11, 2017.)

6. 著者プロフィール

佐藤 亜矢子 (Ayako SATO)

東京藝術大学大学院博士後期課程在籍。FUTURA、NYCEMF、SMC、ICMC、Banc d'Essai (Ina-GRM) 他、入選・上演歴多数。Destellos Competition 佳作、プレスク・リヤン賞 2013 第三位、東京藝術大学大学院アカンサス音楽賞、文化庁新進芸術家海外研修制度短期研修員 (2017)、公益財団法人かけはし芸術文化振興財団奨学生 (2017) 等。